

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Subsistence Differentiation by Altitude in Bhutan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗田, 靖之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004371">https://doi.org/10.15021/00004371</a>

## ブータン・ヒマラヤの生業形態の多様性

栗 田 靖 之\*

### Subsistence Differentiation by Altitude in Bhutan

Yasuyuki KURITA

Bhutan is located on the South slope of the Great Himalaya. The Northern border between Bhutan and Tibet is above 7,000 m., but the Southern one, between Bhutan and India, is only about 200 m.

Bhutan can be divided into three areas by altitude. Residences start from 4,100 m. In this alpine zone annual rainfall is 400 mm, 60–90 percent of it falling in the Monsoon season. In this area, the main subsistence is seasonal Yak nomadism.

The 3,000–1,500 m. zone, the so-called middle inner Himalaya, has a cold temperate climate with annual precipitation averaging about 1,000 mm. The western region receives a comparatively higher rainfall. Buckwheat is cultivated at the higher elevations and rice in lower sites. Cattle breeding is also common. Agricultural field move by season, with those at higher elevations being cultivated in summer and the lower sites in winter. Cattle are also relocated to lower sites in the winter. This might have been influenced by the tradition of Yak nomadism.

Near the southern border, at an elevation of less than 1,500 m., the climate is hotter and humid, with average annual temperatures ranging from 15–30°C and a rainfall of 2,500–5,000 mm in some areas. In that zone the rice is the main crop.

In cultural terms, Yak nomadism came from the North (Tibet) and rice cultivation might have been brogught from the South (Assam). Thus Bhutan lies at the junction of the Tibetan and Assamese cultural zones.

---

\* 国立民族学博物館第2研究部

- |                 |               |
|-----------------|---------------|
| 0. はじめに         | 7. ウシの飼育      |
| 1. ブータンの自然条件    | 8. ウマの利用      |
| 2. ブータンの川       | 9. トランスヒューマンス |
| 3. ブータンにおける民族分布 | 10. ソバ作り      |
| 4. ヤクの飼育        | 11. 稲作        |
| 5. ヤクの屠殺        | 12. むすび       |
| 6. ヤクの肉の加工      |               |

## 0. はじめに

本論は、ブータンにおける標高差による生業形態の違いについて報告することを目的としている。ブータンには、現在も個人の旅行が制限されているとはいえ、近年数多くの団体旅行者が訪れるようになり、いろいろな見聞の報告が行われるようになった。その意味では、ブータンに関する紹介時代はすでに終わったといっても良いだろう。その結果ブータンに関しては、今後より一層実証的な研究がのぞまれる時代となったとすることができる。

また一方、今日までのブータンに関しては、宗教、歴史を中心とした人文学的研究がその主流をしめていた。とくにこのような傾向は欧米の研究者の間で顕著である。ブータンの人びとがどのような自然条件のもとに住み、どのような生業を営み、その生活習慣がどのようなものであるかに関する研究は、むしろすくなかったといわなければならない。

さて、ブータンに関する組織だった初期の研究としてはカラン [KARAN 1967] を挙げることができる。それとともに、わが国にもすぐれた研究がある。たとえば、1957年日本人としてはじめてブータンを訪れた中尾佐助の著書 [中尾 1971] や、1964年からブータンに農業指導のため滞在している西岡京治の著書 [西岡・西岡 1978]、また中尾と西岡の共著による研究書 [中尾・西岡 1984]、それに加えて、ブータンを東西に踏査した京都大学山岳部の報告書 [桑原(編) 1978] などである。

本報告においては、著者自身がブータンにおいて行った調査と民具収集の経験をもとにして、ブータンの生業のあり方をそこで用いられる民具との関連に注目しつつ報告したいと思う。

ブータン社会の興味ある特徴は、ヒマラヤの山腹に、その高度にしたがって、たくみな生業形態が展開していることである。

本稿においては、はじめに北部高地におけるヤクの移牧とそれより低地におけるウ

シの飼育について報告をする。そしてそれにつづいて、高地におけるソバ栽培と稲作についての報告を行い、合わせてブータンの文化を考察することをもくろんでいる。そしてこれらの生業を成り立たせている物質文化を、本館所蔵のブータン収集品との関連を明らかにしながら論考したいと考えている。

## 1. ブータンの自然条件

ブータンは、バングラデシュの北方、ヒマラヤ山脈の東部、およそ北緯26度45分から28度10分、東経88度45分から92度12分に位置している。ブータンは南北がおよそ170キロメートル、東西は300キロメートルであり、その面積はおよそ46,500平方キロメートルである。

ブータンの自然条件の大きな特徴は、北部のヒマラヤ山脈が7,500メートルの高さにおよんでいるのに対して、南部国境地帯では標高百数十メートルほどである。ブータンの南方はアッサム平原であり、ブラフマプトラ河が西流している。

ブータンの地理的景観を単純化して述べると、ヒマラヤ山脈の南斜面に広がった地域といえるのであろう。しかし実際は、もっと複雑な地形をしている。ヒマラヤ山脈から南にのびた支尾根は、網目のように複雑な地形を描きながら、徐々に高度を下げ、アッサム平原に至っている。

まずはじめに、ブータンの背景をなすヒマラヤ山脈について見ることにしたい。ヒマラヤ山脈には、エベレスト(8,845メートル)、カンチェンジュンガ(8,598メートル)といったネパール・ヒマラヤの高峰につらなつて、その東方にはブータン・ヒマラヤがあり、そこには、西から、チョモラリ(7,320メートル)、ツェリムカン(6,900メートル)、カンチェダ(6,800メートル)、マサ・コン(7,200メートル)、ツェンダカン(7,200メートル)、テリカン(7,300メートル)、ジェジェカンパー(7,300メートル)、ガンカープンスム(7,541メートル)、クーラカンリ(7,569メートル)といった高峰がならびたっている。

これらのブータン・ヒマラヤの標高については、最近の調査でかなり疑義が表明されている。すなわち1985年10月の京都大学ブータン・ヒマラヤ学術登山隊の測量においては、マサ・コン峰はブータン政府の発表した標高が7,200メートルであるのに対して、6,800メートル前後の標高を算出している。また同年同時期に、ブータン中央部のナムシラに登頂した千葉大学登山隊からも、ブータン政府が発表した標高は6,500メートルであったが、高度計は6,000メートルしか示さなかったと報告されている。こ

のような報告があることから、これらブータン・ヒマラヤの標高は、今後の学術的に正確なる測量により、大いに変わる可能性があるだろう。

このヒマラヤ山脈は、同じ大陸に属していながら、インドとチベットとの間に立って、この二つの地域にきわだった気象環境をつくり出す上で、とてつもなく大きな役割を果たしている。すなわち、6月から9月にかけて、インド大陸に発生するモンスーンの雲を、このヒマラヤ山脈がさえぎって、ヒマラヤの南山麓に多量の雨をもたらすのである。

インド大陸におけるモンスーンは、ヒマラヤ山脈と大いに関係のあることとして論じられてきた。安成らは、モンスーンとヒマラヤの関係について、次のように論じている [安成・藤井 1973: 4]。

「……大量の降雪（水）は、インド洋からやってくる湿ったモンスーン気流によってもたらされる。平均的な自由大気中では、熱帯といえども、5,000 m 以上になると、大気中の水蒸気は極端にすくなくなり、この高さ以上での大量の降水量は、常識的には考えにくい。しかし、強い対流などにより、水蒸気が上層にまで大量に輸送されるとすると、高所での多量の降水もあり得よう。モンスーン期のヒマラヤでは、まさにこのような強い上昇気流が、広域に生じていると考えねばならない。」

「そしてこのような強い上昇気流は、広大なチベット高原を含むヒマラヤ山塊全体が、夏になるとあたかもホットプレートのように熱せられるために生じることが、明らかになってきた。」

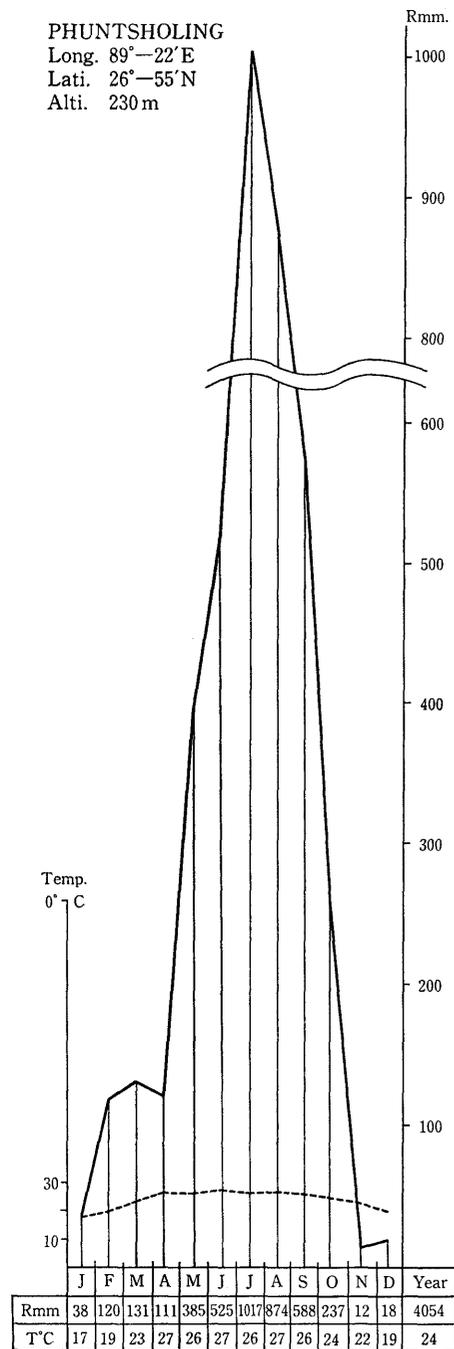
と述べている。すなわち、夏になると、ヒマラヤ山脈をふくむチベット高原が熱せられて、大気は強い上昇気流となってチベット高原には低気圧帯が出現する。そしてそのチベットの低気圧帯に対して、南の湿った空気が吹きこむ。その時ヒマラヤ山脈の南斜面がこの上昇気流を助長する役目を果たし、本来ならば、運ばれるはずのない高度にまで湿潤な空気が運び上げられ、それが雪や雨となってヒマラヤ山脈に降る。これがモンスーンであると考えられているのである。

ブータンは、このようにヒマラヤ南山麓に位置することから、6月から9月までのモンスーン期には、多量の雨が降る。各地における雨は、図1に示した通りである。プンツォリンの年間総雨量は、4,054ミリメートルであり、その気温も年間気温が24度である。このことから、プンツォリンに代表されるブータン南山麓の町が、熱帯多雨帯に属していることが明らかであろう。

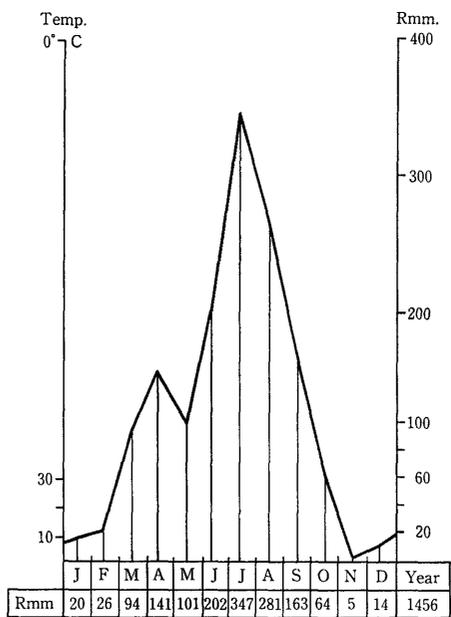
## 2. ブータンの川

そしてこのモンスーンは南部低地に雨をもたらすだけでなく、北部のヒマラヤ山脈

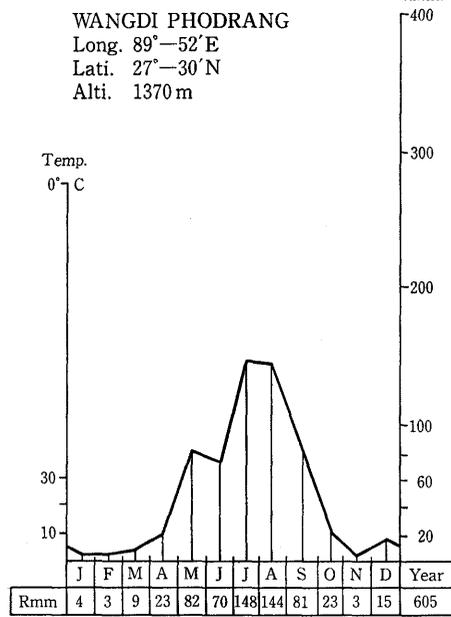
PHUNTSHOLING  
 Long. 89°-22'E  
 Lati. 26°-55'N  
 Alti. 230 m



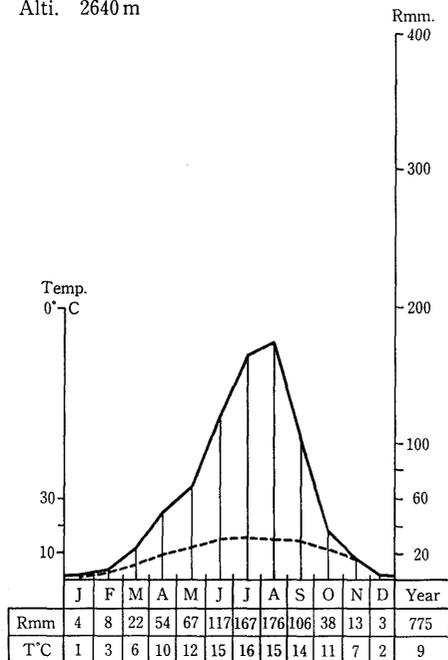
CHHUKHA  
 Long. 89°-35'E  
 Lati. 27°-2½'N  
 Alti. 1400 m



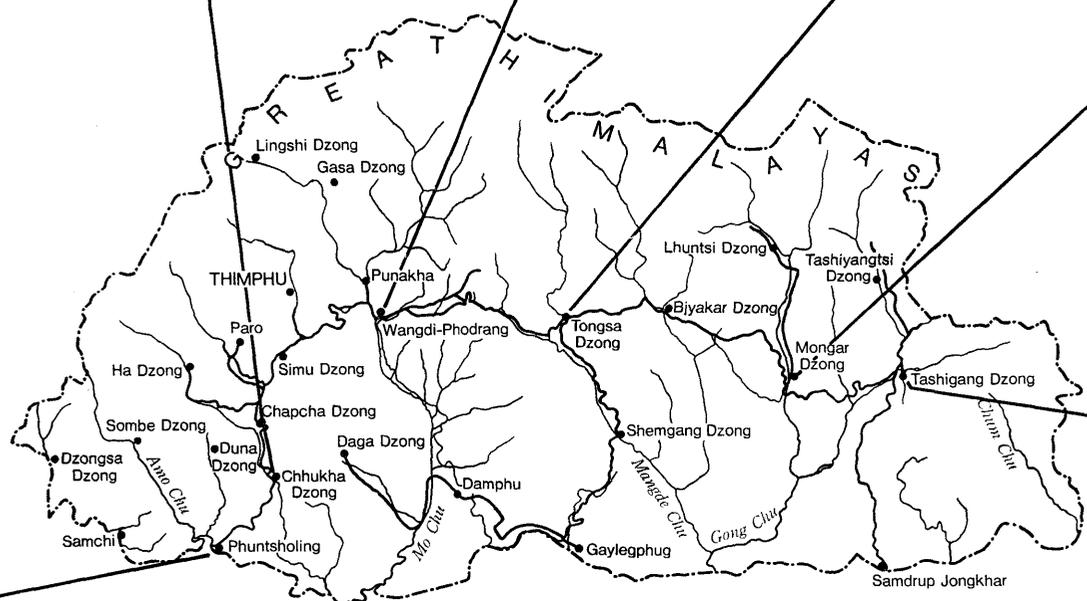
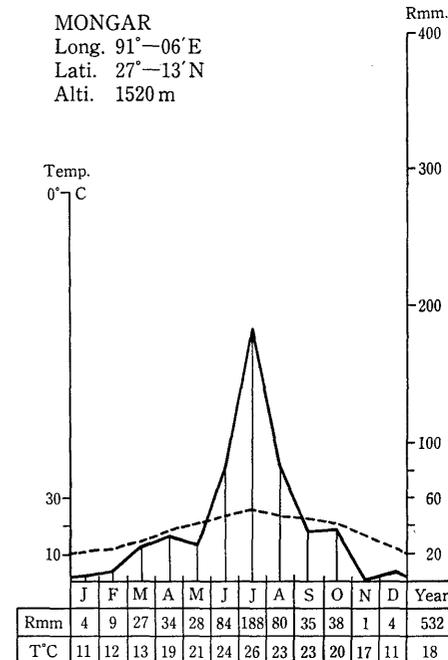
WANGDI PHODRANG  
 Long. 89°-52'E  
 Lati. 27°-30'N  
 Alti. 1370 m



KARSUMPHE (BUMTHANG)  
 Long. 90°-43'E  
 Lati. 27°-33'N  
 Alti. 2640 m



MONGAR  
 Long. 91°-06'E  
 Lati. 27°-13'N  
 Alti. 1520 m



TASHIGANG  
 Long. 91°-27'E  
 Lati. 27°-16'N  
 Alti. 1000 m

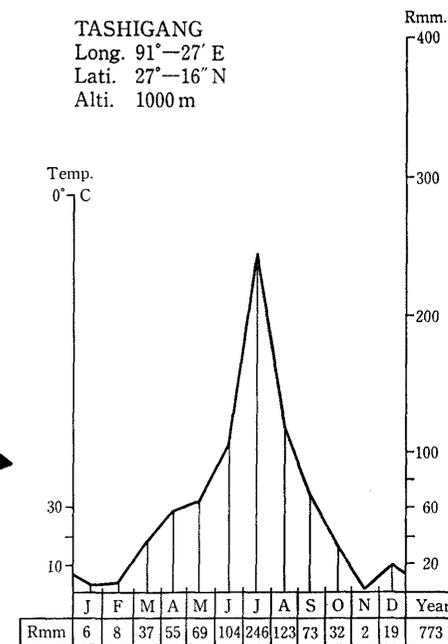


図1 ブータン各地の年間降雨量 ([Negi 1983] より作図)

では、雪となり、その雪が巨大な貯水源としての役割を果たしている。すなわちモンスーンによって降った雪は、氷河となってヒマラヤ山脈に蓄積されるのである。最近では衛星写真により今日まで踏査されなかった地域における氷河面積までもが算出されるようになった。安成ら[安成・藤井 1973: 137]は、その著書の中で、藤井[藤井 1977]の文献を引用しながら、ブータン・ヒマラヤにおける氷河分布面積を2,730平方キロメートルであるとしている。いま平均的な氷河の厚さを50メートル、氷河の氷の比重を0.83と仮定すると、このブータン・ヒマラヤにはおよそ1,000億トンの水が貯蔵されていることになる<sup>1)</sup>。

このようなブータン・ヒマラヤにおける氷河の特徴は、氷河の末端高度がネパール・ヒマラヤに比べて著しく低いことである。ブータン北方のマサ・コン峰における氷河の末端高度は、およそ4,500メートルであった。安成ら[安成・藤井 1973: 140]の報告では、アッサムにおける氷河の末端高度はネパール・ヒマラヤに比べて2,000メートルも低いという。そしてその理由は、アッサム地方は、夏の南西モンスーンによる降水量が数千ミリメートルにもなる地球上稀有の多雨地帯であり、このような雨がヒマラヤの高所では、大雪となり氷河を涵養すると同時に、厚い雲は日射をさえぎり氷河の融雪を低く押さえて氷河を発達させる条件をつくり出していると述べている。

さて、このように蓄積された水が、やがてヒマラヤの南山麓を川となって流れ下る。ブータンの地形について語るとき、ブータンを南北に流れているこれら急峻な川についてのべることから始めたいと思う。

一番西に位置する大きな川は、アモ・チュ(Amo Chu)である。アモ・チュはチベットに源を発して、チベットのヤートンにおいて二つの川が合流しブータンの一番西を流れる川となってプンツォリンで支流と合流して、アッサムに流れ出てトルサ(Torsa)川とよばれる。

第二の川は、ウォン・チュ(Wong Chu)である。この川は、ハを流れるハ・チュー(Ha Chu)、パロを流れるパロ・チュ、ティンプーを流れるティンプー・チュが合流して、ウォン・チュとなる。またこの川は下流ではチン・チュ(Cin Chu)、ライダク(Raidak)川ともよばれる。

第三の川は、マサ・コンのあたりに源を発するモー・チュ(Mo Chu)とその東方のジュジュカンパーカン、カンパーカンに源を発するポ・チュ(Pho Chu)とがプナカで合流して、プナカ・チュ(Punaka Chu)、ないしはモ・チュ(Mo Chu)となる。またこの川は、下流ではサンコシュ(Sankosh)とよばれることもある。

1) 氷河の厚さ、氷河の比重に関しては、武庫川女子大学、横山宏太郎氏よりご教示いただいた。

第四の川は、トンサを流れるマンデ・チュ (Mangde Chu) がトンサをすぎてトンサ・チュ (Tongsa Chu) となり、またブムタン (Bhumtang) を流れるメラカル・チュ (Melakar Chu) がブムタンをすぎてブムタン・チュ (Bhumtang Chu) またはマンデ・チュ (Mande Chu) となり、遠くクーラカンリ (Kula Kanri, 7,569メートル) のあたりのチベットから流れ出すクル・チュ (Kuru Chu) とタンガン (Tashi Gang) を流れるダンメ・チュ (Dangme Chu) がひとつになってマナス・チュ (Manasu Chu) となる。

このように、ブータン川は、複雑な地形を縫うようにして流れており、そしてその地所によって呼び名がかわるために、大変複雑である。ブータンの主要な川は図2にまとめた。

### 3. ブータンにおける民族分布

ブータンの人口は1981年の政府発表の数で116万人である。[*Royal Government of Bhutan* n.d.: 4-5]。その人口を構成しているのは、大きくはブータン人とネパール人であるが、その比率に関しては統計的資料はない。しかしおおよそブータン人が86パーセント、ネパール人およびその他の民族が14パーセントであるといわれている。

ブータンにおける民族分布は、大きくは次のようにわかれていると述べることができるだろう。すなわち、南部国境線に近い1,000メートルまでの低地には、もっぱらネパール人が住んでいる。たとえば、ブータン西南部の町サムチー (Samchi) の住人の大半はネパール人である。また、中央部の南のチラン (Chirang) のほとんどの人口はネパール人であるし、ゲレフー (Gelekphu) の北にあるスレー (Sure) には、大きなネパール人の村がある。おおむねネパール人は、南部低地に居住しているといえることができる。

それより高度の高い比較的乾燥地帯にはブータン人が居住している。ブータン人と一言で表現されるが、かれらの間では、西ブータンと東ブータンとでは、お互いがその出自を異にしていると認識している。すなわち、西ブータンの人びとは、自らをガロン (Ngalong 最初の人) とよび、自らの出自をチベットであると認識しているのに対して、東ブータンの人びとは、自らをシャーチョップ (Sharchop 東の人) とよび、その出自は南部のアッサミーズであると認識している。この東西ブータンの分岐は、ブラック・マウンテンを横切る峠ペレ・ラをひとつの境としている。たしかに、西のブータン人と、タシ・ガンで見えるブータン人とは、顔つきが異なっている。このよう

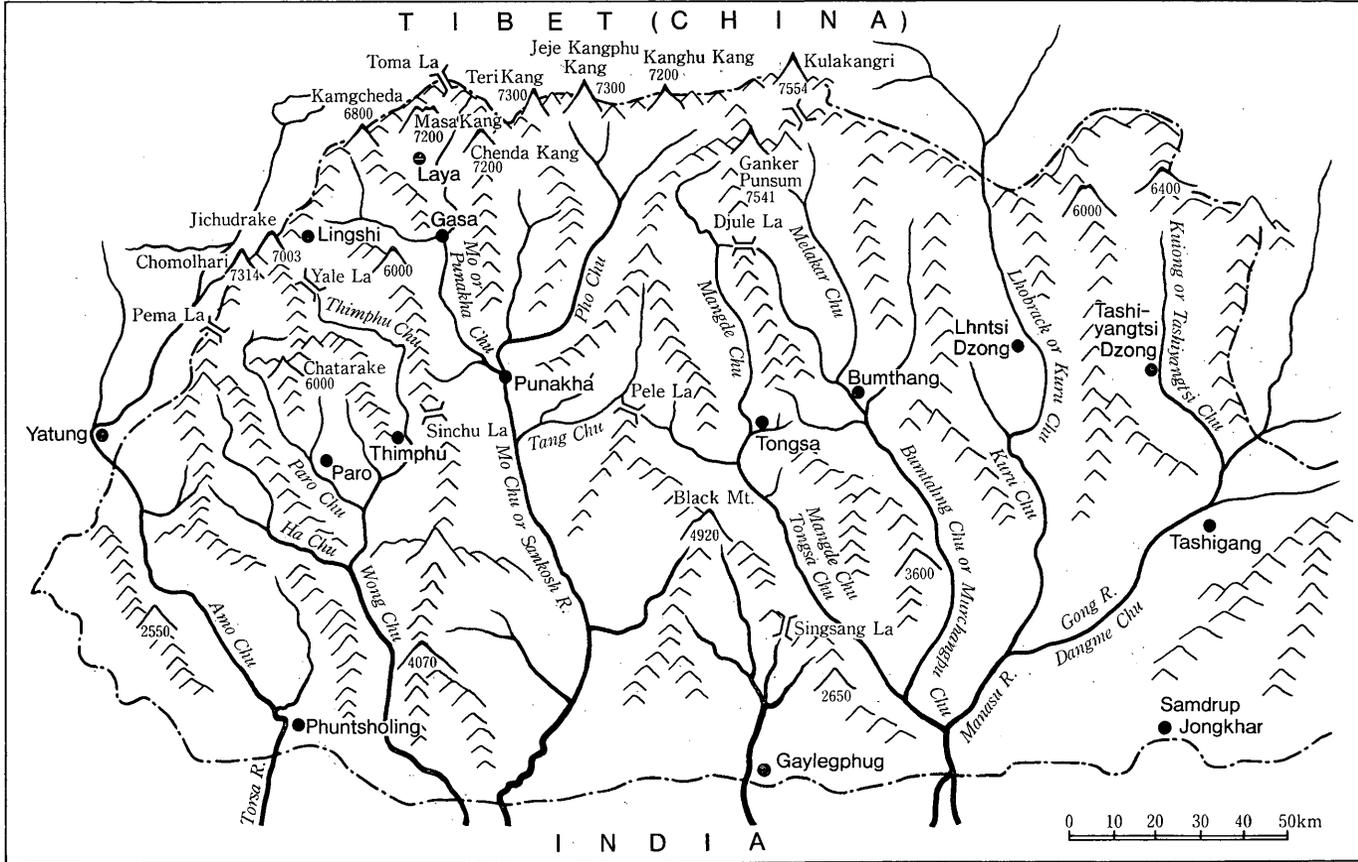


図2 ブータン地理概念図

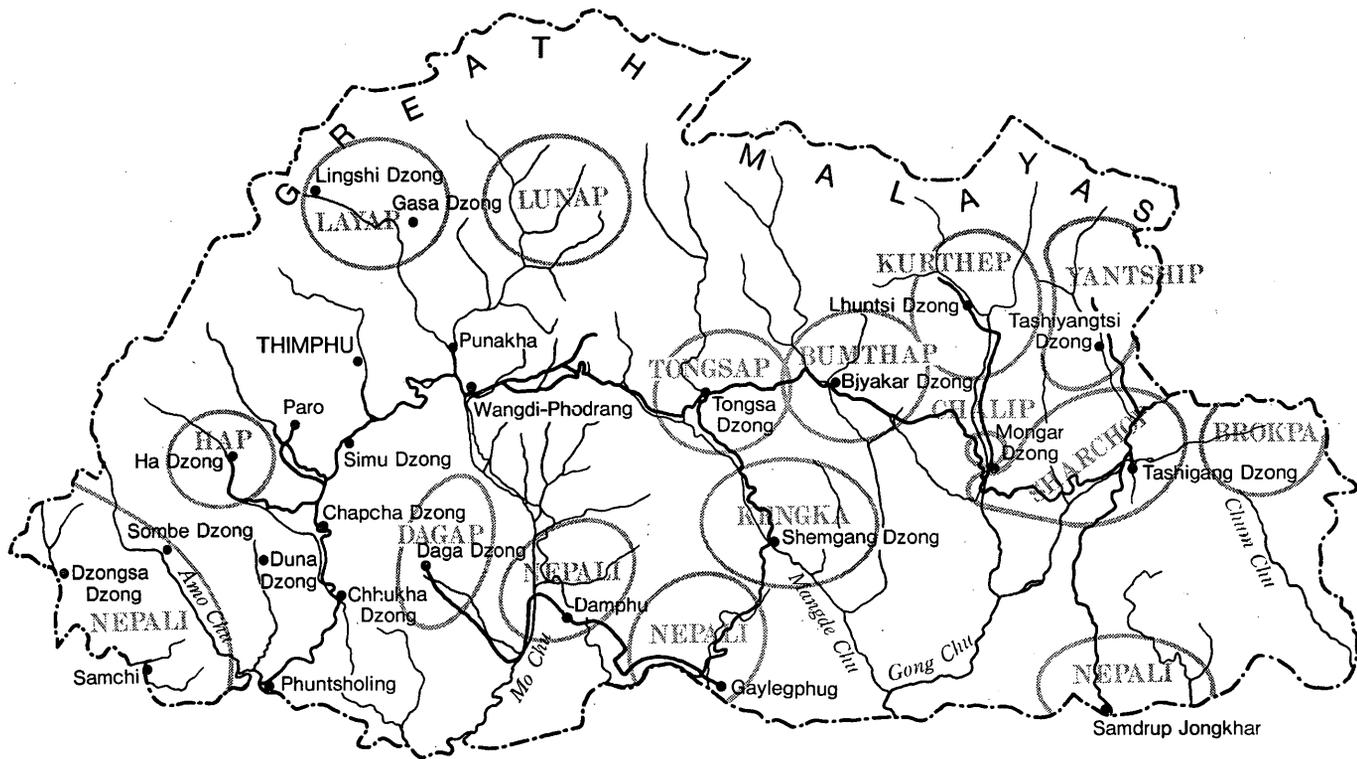


図3 ブータンの方言概念図

に、西と東とで、それぞれの出自に対する認識が異なっているのである。

それに加えて言語も地方によって大きく異なっている。学校教育は英語と共通語としてのゾンカで行われているが、地方における共通語の普及度は低い。ブータンにおける方言の分布に関する概念的な図は図3に示した。

ブータンにおける大きな区別は、このように南部地帯のネパール人と、中央部地帯以上のブータン人と大きく分けることができるが、その他にも、いくつかの少数民族の存在を認めることができる。

その中でも数の多いのは、ラヤ地方のラヤップと呼ばれる人びとである。彼らは、もっぱらヤクの移牧を行っている。しかし移牧を生業とするブータン人は他にも居る。ラヤップをひときわ特徴づけているのは服装である。ラヤップの男性は他のブータン人と同じくゴ (*Gho*) と呼ばれる服装をしている。それに対して、ラヤップ以外のブータン人の女性がキラ (*Kira*) とよばれる幅広の一枚布の衣装を着用しているのに対して、ラヤップの女性は、ヤクの毛をつむいだ黒くて長いスカート (*zum*) と、同じく黒いチョッキ (*kora*) を着用しており、頭にはラヤ方言でベロ (*bero*) と呼ぶ、竹で編んだ帽子をかぶっている。また、身体にはスプーンなどを細工したチャチャー (*charcha*) と呼ばれる装身具を身につけている。彼ら自身、自らの出自はチベットであるという。

一方ブータン東部のサクテン谷 (*Sakuteng*) においては、ダクパと呼ばれる人びとが居住している。ダクパの特徴は、四本のタレのついたヤクの毛でつくった黒いベレー帽と、ヤクの皮のチョッキである。ダクパの住居地は主として標高3,000メートルのサクティン谷であるが、彼らはタシガン周辺にまであらわれている。彼らはヤクの飼育をし、石づくりの家に住んでおりトウモロコシを栽培している。死者は切り刻んで川に流すといわれているが、その生活については、あまり知られていない。ダクパについての、西岡らの記述は貴重なものである [西岡・西岡 1978: 152-156]。また彼らは、半農半遊牧民であるので、牧畜民を意味するドクパと称されることもある [ストゥリドク他 1985: 103]。このダクパの言語は、ゾンカよりチベット語に近いといわれているが、その詳細は明らかではない。またこの人びとは、インドのアルナチャール・プラデシュやチベット東南部の少数民族モンパと似かよっているといわれているが、どのような関係にあるのかは今後の研究を待たねばならない。

またブータン人は、牧畜民全体をダクパと総称することもある。たとえば、「プナカの奥にはダクパが住んでいる」といった表現をするが、これは明らかにラヤップを示していると考えられる。

この他にも、ブータンの西南部、プンツォリンの西岸には、タバ・デュラデュル

(Taba Dradul) という民族が住んでいる。彼らは明らかにブータン人とは違った生活を営んでいる。こんな話がある。プンツォリンのゾンダ（知事）がこのタバ・デュラデュルの地域に道を開き橋をかけるために、その村人に使役を命じたところ、われわれはシャブドゥン（1639年から1773年ごろまでつづいた聖俗最高の権威者）とは、キンマの実と弓をつくって納める約束となっているので、そのような租税には従う。必要なキンマと弓の量を知らせて欲しい。しかし道のための使役はシャブドゥンとの約束にはなかったと言ったという。これなどは、このタバ・デュラデュルの人びとが、ブータン人と何百年にもわたって隔離した生活を営んでいた証拠であろう。

また同じくシブツーの近くには、アパデシーというインド系の民族が住んでいる。彼らはサリーを着用してその外見は全くインド人とかわらないという<sup>2)</sup>。

このようなブータンにおける少数民族については、現在のところほとんど知らされておらず、中央政府の機構が整い、その威信が照葉樹林帯の奥地に及ぶに従って、徐々に明らかになりつつあるのが現状である。

#### 4. ヤクの飼育

ブータンにおける家畜の飼育状況は、表1に示した。農耕民に対して、ヤクやウシの飼育を生業としている牧畜民は、ジョップと呼ばれている。このジョップの暮しぶりを、プナカの北方160キロメートルにあるラヤ村の周辺をひとつの例として見ることにしたい。ラヤ村は標高3,800メートルで、その戸は60戸、人口はおよそ1,000人である。

稲作は2,700メートルが限界であるので、当然ラヤ村では、ソバ、ムギ、ジャガイモ

表1 ブータンにおける飼育家畜頭数  
[Royal Government of Bhutan n.d.: 34] より (単位: 千頭)

	西 部	中央部	東 部	南 部	計
ウ シ	66.1	41.8	108.6	100.5	317.0
ヤ ク	18.0	2.0	6.1	—	26.1
ウ マ	5.1	2.7	11.1	2.4	21.2
ヒ ツ ジ	12.2	8.8	7.8	11.2	40.1
ヤ ギ	—	6.1	—	36.2	42.3
ブ タ	24.1	6.1	16.4	8.8	55.4
家 禽	29.8	25.7	50.0	80.9	186.2

2) ダクパとアパデシーについては、元の通信・観光大臣、リョンポ・サンゲ・ベンジョール氏からの話による。

を中心にしてカブやカラシナなどの野菜の栽培が行われている。それとともに、ラヤ村の生業をささえているのはヤクの飼育である。ラヤ村のヤクの数、およそ4,000頭であるから、一人あたり4頭ほどになる。多い家族では、およそ100頭ほどのヤクを飼育しており、少ない家族でも20頭ほどのヤクを飼育している。

ヤク (*Bos grunniens*) は偶蹄類ウシ科の動物である。プータン人は雄のヤクをヤク、雌のヤクをディ、子供のヤクをヤーと呼んで区別するが、以下この動物をヤクと総称する。肩高は成獣でおよそ、1.5メートル、体重は500キログラムから、800キログラムに及んでいる。胸から腰にかけて黒い毛でおおわれている。白い毛のものもあるが、これはまれである。プータン人は、白いヤクはとくに美味であるという。

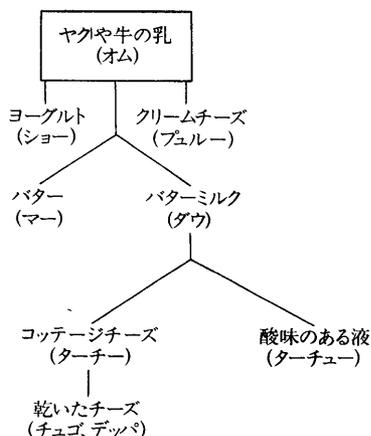
ヤクの大きな特徴は、低酸素、低温に耐えることである。私の観察でも良好な草地があれば5,000メートルにおいて放牧していた。しかし一方、3,000メートル以下での飼育は困難であるといわれている。ラヤ村の場合、村人は基本的に移牧民であるが、ラヤの人びとは他のプータン人と同様に、ラヤ村に大きな家を持っている。しかし、彼らはほとんどその母村で過ごすことはない。彼らはいつもヤクを追って牧草地をめぐっている。牧草地には、ノーチムとよばれる石づくりの小屋がある。そしてこのノーチムで、またはテントを張って一年の大半を生活する。そのために一年間で家族が一緒になるのはむしろまれなことであり、祭りの時以外にはほとんど一家が顔を会わせることがない。

春、夏、秋にはこのように移牧を行うが、冬はヤクやウシには飼料を与えなければ冬が越せないという。それでもひと冬に、ヤクの子どもは3から4パーセントが死亡するという[NHK取材班 1983: 229]。

ヤク飼育の大きな目的は、乳をしぼることにある。搾乳は朝夕二回で、一回の搾乳で、およそ1リットルほどをしぼる。搾乳の方法は、多くの牧畜民で見られるように、はじめに子供のヤクに少し乳を吸わせる。そしてすぐに子供のヤクをはなし、雌のヤクの後脚をヤクの毛でつくったロープでゆわえ、女性が搾乳する。しぼった乳は、さっと加熱して、そのまま飲むこともあるが、これはむしろまれである。その大半はバターづくりに利用される。およそ20リットルほどのミルクを一晩放置する。そして、やや醗酵しかけたところをマチャまたはゾム (*zom* 標本番号 HO 115907) とよばれる攪拌機に入れ、攪拌棒でかきまぜる。その作業は、およそ2時間ほどつづけられる。2時間ほどたつと、マチャの中で分離したバターを集めて、木製の容器マシェー (*ma-she* 標本番号 HO 115919) に取り出す。このバターは、料理に用いられる。

一方、バターをとった残りの液体を鍋に取って加熱し、チーズを取る。この場合、

表2 いろいろな乳製品  
[西岡・西岡 1978: 144] より



子供のヤクの胃液の一部を加えて凝固させるといったチーズのつくりかたはない。このチーズは、水切りをして、大きな鏡モチのような形につくる。そして、水切りを行い、それを長さ4センチメートルから5センチメートル、厚さ1センチメートルほどの厚さに切って、ヤクの毛で編んだ糸に通して、乾燥させる。これが、チュゴないしはデツパとよばれるチーズである。残った液はダチュとよばれて、飲料にされたり料理に用いられる。

このチーズが白く乾燥したあとは大へん固く、とてもかみきれものではない。プータン人は

それを口の中に入れ、丁度キャラメルのように溶かしながら食べている。ヤクのミルクからつくられる乳製品に関しては、西岡ら [西岡・西岡 1978: 144] にまとめられているので、表2を参照されたい。

搾乳を終わったヤクには、塩を与える。この時には、雌のヤクの角を男がにぎり、ヤクの首を横だきにして上を向かせる。そしてもう一人が、ヤクの口を強引に開かせ、そこへヤクの角でできた容器ウオドゥ (*wodu* 標本番号 HO 115914) の中に塩を入れて、口の中に入れる。同時に、人が口の中にふくんでいた水を、ヤクの口の中に注ぎ込んで、塩を飲み込ませる。こうするとヤクはのどがかわきよく草を食べ、ミルクの出も良くなるということであった。この作業は大変危険が多く、ヤクの角で怪我をすることも多いという。

このように、ヤクの飼育にはつねに塩が必要であり、またかつてチベットとプータンの間の重要な交易品は塩であったのでツァクー (*tsako* 標本番号 HO 115915) とよばれる皮袋やツァドォ (*tsado* 標本番号 HO 115883) といった容器に塩を入れて運搬する。

ヤクは、荷運びに利用されている。ヤクに荷をつけるときは、地面に4～5メートルほどのヤクの毛でできた一本のサブ (*thub* 標本番号 HO 115887) とよばれるロープを張り、そのロープに1メートル間隔で2メートルほどのロープをゆわえつける。そしてヤクに近づき、ヤクの角にドン(グ) (*dong* 標本番号 HO 115905) というロープを投げかけて、角をおさえる。この時、ヤク使いたちは、ヤクを驚かさないようにヤクの前から近づいてかなり慎重に行動する。そして、さきほどの2メートルほどの

ロープに、ヤクの角をゆわえつける。

ヤクに荷物をつけるときは、このようにヤクをロープにゆわえつけた状態で、ヤクの背に、2枚から3枚の毛布状の布をしく。そして、木製の鞍ガ(*ga* 標本番号 HO115903)をおく。鞍を固定する紐は、前肢のうしろで胴をまわして一本、尾の所を通して一本、胸の部分で一本の合計3本である。荷はおよそ一荷が30キログラムから40キログラム程度の荷をゼム(*zem* 標本番号 HO115888, 115889)やドクチェ(*dockche* 標本番号 HO115891)とよばれる竹製のカゴに入れ、左右に二つくりつける。この荷をくりつけるひもは、通常皮を細長く切った皮ひもである。

ヤクに荷運びをさせるとき、畜群のコントロールは、馬に比べてかなりやっかいである。ヤクは、よくどう猛であるといわれているが、ブータン人はヤクは大変臆病な動物であるという。ヤクは大きな音や急に目の前を横切るような動き、あるいは赤い色に驚いて暴走する。その時には、荷をふり落としたりするので、ヤク使いたちは、けっしてヤクを驚かさないようにしているということであった。

しかし実際にヤクを進ませるときは、ヤク使いたちは、投石器(*oordo* 標本番号 HO115898)を用いて小石を投げながらヤクをコントロールしている。そして、口笛や大声をあげている。ヤクは馬と違って一列に進むことがなく、どちらかというバラバラと一群になって進むので、畜群をコントロールするヤク使いたちの役目は大変である。

通常ヤクは、乗用には向いていないといわれている。そのほとんどが荷役用にもちいられている。そして、荷役用のヤクには通常鼻輪はついていない。しかし、チベットでもブータンでも乗用のために馴化されたヤクがいるが、これらには鼻輪(*nakap* 標本番号 HO115902)を付けている。また装飾だけを目的にして鼻飾りや耳飾り(標本番号 HO115901)を付けていることもある。

夜営地につくと、先に述べたように地面にロープを張り、それにヤクを一頭ずつ角にロープをかけてつなぐ。そして荷をおろす。荷をおろした後は、ロープからヤクを放って自由に牧草を食べさせている。そして朝になるとヤク使いたちは、口笛や大声をあげながらヤクを再び集めにかかる。霧のかかった日などはこれは大変な作業であるが、この時は、ヤクの首に付けたディパとよばれる鈴(*dipa* 標本番号 HO115913)のガラゴロンと鳴る音が手がかりとなる。

遊牧地で畜群をコントロールするもうひとつの方法は、子どものヤクを夜になるとあらかじめ地面にうちつけたロープにつないでおく方法である。私の観察では、7頭から8頭をゆわえつけていた。この時、子どものヤクの口に筒状のマスクをつけるこ

ともある。これは、子どものヤクが勝手に母親から乳を飲まないようにするためである。このように子どものヤクを一カ所に集めておくと、夜になって母親のヤクがこの子どものヤクの群れのまわりにやって来るので、群れのコントロールが行いやすいという。

雄のヤクは通常4才から5才ごろに約半数以上を去勢する。この場合、雄同士を戦わせ、勝ち残った強いヤクを残していく。雄のヤクと雌のウシの一代雑種をゾウ (*dzo*) と呼んでいる。ヤクの平均寿命はおよそ20年程度である。

## 5. ヤクの屠殺

ブータン人は、インド人と違ってウシやヤクの肉を大量に食べる。屠殺・解体のプロセスをヤクの場合で見ることにする。

屠殺するヤクは、とくに何歳ごろという好みはないという。小形のもは値段が安く、大形のもは値段が高い。私が1985年に観察したのは、3歳のもで中形のオス、体重は推定で500キログラム程度のもので3500ヌルタム（1ヌルタムは、およそ20円）であった。1958年の中尾の記述ではヤク一頭がおよそ100ルピー（当時の金額で7500円）と記述している [中尾 1971: 162]。また西岡らはパロにおいて、1964年ごろおよそ500ルピーで270テ（約300キログラム）のもみを手に入れ、それとヤク一頭と交換したと記述している [西岡・西岡 1978: 58]。

パロやティンパーといった町の人びとがヤクを買うのには、つぎのような方法によっているという。それは春のはじめに、パロやティンパーの人は、ある特定のヤクを見つけ、それをその年の冬に肉にすることを契約する。牧畜民は、夏にはヤクを遊牧地に追い上げ、買い手のきまったヤクは、とくによく草を食わせて念入りに肥らせる。冬になってふたたびヤクを追って町に下り、春に約束した買い主にヤクの肥え方を吟味してもらう。そこで買い主が満足したとき、はじめてそのヤクを屠殺するという<sup>3)</sup>。

ヤクの屠殺に関して、ブータン人はチベット仏教の影響で、その屠殺を大変嫌っている。そして通常はチベット人にその屠殺を依頼している。しかし私がチベットで見聞したところでは、チベットにおいてはチベット人自身もヤクの屠殺を嫌っている。中尾によれば、ブータンにおける屠殺人の社会的地位は極端に低いという。中尾は「屠殺はすべて特殊なカースト（階級）の人たちの仕事だ。彼らは屠殺者階級とは絶対に結婚せず、長い間いやしんできた。」 [中尾 1971: 134] と記述している。

3) フランス国立科学センター研究員・ブータン国立図書館顧問、今枝由郎氏の話による。

今回の屠殺においては、屠殺人はブータン人であったが、後脚を固定して引くように言われた3～4名の若者以外は、すべてのブータン人は屠殺の現場を離れて、テントの陰でその現場を見ようとはしなかった。牧畜民でありながら自らが飼育している家畜の屠殺を嫌うというのは、牧畜民としては不自然なことである。このことから、ブータンやチベットにおける牧畜の技術には、何か未熟なところを感じるのである。

屠殺にいたる手づきは、次のようなものである。まず屠殺するべきヤクを客に見せて、客の納得を得たことを確認した。そして、その場にいる他のヤクを遠くに追い払い、屠殺現場が他のヤクの目にふれないように配慮した。つづいて、屠殺するヤクの前脚と後脚にロープを巻きつけて引きたおす。前脚と角にかけたロープは、近くの岩に結びつけて固定する。つづいて後脚を3人の男が引きヤクの身体をのぼした状態で固定する。

以上の用意ができた所で、屠殺人は手に刃渡り30センチメートルほどのギチュと呼ばれるナイフ(*gichu* 標本番号 HO115957)を持ってヤクに近づき、ヤクの腹部、胃の上のあたりを、約30センチほど切りひらく。この時ヤクは身をもだえさせるが、悲鳴は上げない。切り開かれた部分からは、ヤクの第二胃が突出する。つづいて屠殺人は、片肌を脱ぎこの切り開いた部分から腕を差し入れる。そして腕を食道に沿ってヤクの胸部にまで挿入し、ヤクの両肺に穴をあけて、ヤクを窒息させた。ヤクは苦しそうに舌を出す。この時、ヤカンに水をくんできて、ヤクの舌の上に注いでやる。これは明らかに末期の水の儀礼である。ヤクはおよそ1～2分で絶命する(図4)。



イラスト 安芸早穂子

図4 ヤクの屠殺

ヤクの屠殺の仕方は、ブータン国内においても、この他にいろいろなやり方がある。たとえば、チベット人は、動かぬように固定したヤクの心臓を、ギチュでひとつきして屠殺する。この場合、ギチュを抜くときに多量の血が出る。リンシー地方では、ヤクの後頭部を切って屠殺するのが一般的なやり方であるという。

屠殺が終わると、関係者に酒がふるまわれた。そしてひきつづき、解体作業が行われる。ヤクは仰むけにして、四肢を上へ上げた状態にする。まずはじめに、ヤクの長い毛を刈り取る。このヤクの毛は、布地やロープをつくるための材料となる。ちなみに牧畜民が用いているテント (*ja* 標本番号 HO115877) や雨具 (*chako* 標本番号 HO115909) もヤクの毛から織られたものである。

つづいて、オスの場合、生殖器を切り取る。そして、腹部の皮を縦に切り、前肢、後肢の内側で同様に縦に切り目を入れて、皮をはぐ作業を行う。背の部分の皮をはぐためには、ヤクを左または右にかたむけて、作業をやすくする。はぎとった皮はそのまま地面に広げたままにしておく。つづいて、腹部を切り開き、内臓を取り出す。胃および腸は、ひろげられた皮の上に引きずり出される。

つぎに、頭部と前肢を胴体から切りはなす。ひづめの部分は、ギチュで骨とともにたたき切る。つづいて後肢を胴体から切り離す。この段階では、ひろげられた皮の上には、頭部を取りさった胴体と内臓だけが残されていることになる。そして胸部に溜った血を器で汲み出してこれは別の容器に保存して、サンショなどの香辛料を加えて腸の中につめて、ギユマとよばれるブラッド・ソーセージをつくる。

解体手順としては、このあと、アバラ骨と背骨の部分で肉を切り離し、解体を終わる。尻尾と尻尾のつけ根の部分のおよそ20キログラムの肉は、屠殺人の取り分となる。

以上の屠殺のプロセスで見事なことは、ほとんど血が地面に流されないことである。それとともに、屠殺、解体のプロセスの中では断末魔のヤクの口に水をふくませたこと以外、この日は儀礼的な行為は何もなかった。

## 6. ヤクの肉の加工

解体されたヤクは、地面に並べられ、その一部は生肉として食された。西岡らによると、パロ地方では、屠殺したヤクの肉は、一晩は食さないと報告されているが[西岡・西岡 1978: 59], われわれの場合はそのようなタブーはなかった。ただし屠殺地が山中であったことと関係すると思われるが、生肉を火であぶって煙を出すと、大雨になるといふ云い伝えがあるので、煙を出すような料理は慎しむようにと忠告された。

肉の大半は、まず第一に乾肉（シャムカ）とされる。この乾肉をつくる作業は、ナイフの刃先を地面に立て、柄を胸の部分にあてて、ナイフを固定する。これはインド包丁のつかい方と同じである。その固定したナイフの刃に肉をあてて、厚さ5センチメートルほど、長さ5～60センチメートルの短冊状に切って乾す。冬ならば数日で乾肉となる。

腸は洗ってその中に、血液、塩、トウガラシ、サンショやその他の香辛料を混ぜたものをつめ、それをゆでて乾燥させる。これはギユマとよばれるブラッド・ソーセージである。ヤクの脳味噌および舌も食料に供される。

ヤクの皮は敷物などに用いられる。しかしブータンにはわれわれのいう皮なめしの技術はない。パロの近くの村で、皮の裏に油をぬって柔らかくすることは行われている。

翌朝、ヤクに対する供養（プージャー）が行われた。これは、ムギコガシで、ヤクの形の人形をこしらえ、これを岩の上に置いた。昨日、ヤクの屠殺の際に後脚を引くように命じられた若者のうちの一人が、その前でお経を上げた。その横ではマツの生木がもやされた。この松の生木をもやすのは、ブータンでは、仏事の前につねに行われる儀礼である。読経がおわると、ヤクの形の人形はくずされ、別の若者の手によって、「ホー、ホー」というかけごえとともに、そのあたり一面にまきちらされた。これは、ヤクが再び生まれかわって、より一層の豊饒をもたらしてくれるようにとの祈願である。

## 7. ウシの飼育

表1からも明らかなように、ブータンでは、317,000頭ものウシが飼育されている。ウシの雄をチャロン、雌をタバムと呼び、通常は3,000メートル以下の地域で飼育している。ウシはヤクと同様にミルクをしぼり、そのミルクからバター、チーズがつくられるが、そのみならず、二頭のウシに犁をひかせて農耕にも利用している。

西岡らはパロ地方におけるウシの所有に関して次のように記述している。

「実は各戸で雌牛を持っているのだが、この牛は低地に住む人との共有の場合が多く、冬の間（10月～4月）は低地の人が飼い、5月になると放牧をしながらパロまで上がってきて、それ以後夏の間はパロの人のものになる。だがパロの村に近い所では放牧する草場がなく、また牛が水田の水をのむと病気になるので、パロより高地の標高2,700から2,800メートルの所で放牧しているのである。その間はバターやチーズは自分達のものになるのだが、往復に何時間もかかるので、ミルクを毎日家で飲むというわけにはいかないようである。」[西岡・西岡 1978: 143]

と述べている。

ブータンにおけるウシの飼育に関して特記すべきことは、ミタン牛 (*Bos (Bibos) frontalis*) の存在である。ミタン牛は、ギャール牛とも呼ばれるが、ブータンではバメイとも呼ばれている。ミタンまたはギャール牛は、おそらくマレーのガウル牛に起源があると考えられている [アイサック 1985: 116]。

ミタン牛の成獣は、大型のものは肩高が1.5メートルほどで、若いうちは茶色をしており年をとると黒ずんだ色になる。雄の成獣は通常足先が白い。角は大きく、外側に向いていて、角の先がまがっていることはない。角の長さは35センチメートルほどである [SIMOONS and SIMOONS 1968: 3]。ミタン牛はビルマの奥地から、インドネシア一帯に生息している牛である。

ブータンの東、インドのアルナチャール・プラデシュには、数多くの民族がおり、そのなかにはこのミタン牛を飼育している民族がいる。しかしその飼育のやり方は積極的に飼育していると言うには、はなはだ疑問な面もある。ミタン牛は通常、自由に林間に放牧されている。そして、ときどき人がそれらのミタン牛に塩を与えて自らの所有物であることを確認しているにすぎないのである。このような状態を半家畜化された状態と呼ぶべきなのであろう。

ミタン牛はそのミルクが利用されるが、とくにそのミルクが珍重されている訳ではない。またミタン牛も屠殺されるが、その肉が特に美味であるということもないようである。ミタン牛が屠殺される大きな契機は、儀礼における犠牲獣としてである。シモンズら [SIMOONS and SIMOONS 1968: 170-184] によれば、アルナチャール・プラデシュにおけるアディ、ロタ、アパ・タニといった民族においては、結婚式、葬式、病気や不運の折に、犠牲獣としてミタン牛が屠殺されるが、このような習慣がブータン人の間にあるとは聞いてはいない。

またこれらの民族の間ではミタン牛を飼うことは、社会的地位を誇示することになると云われているが、このような傾向はブータン人の間にも明らかに認められる。私が調査しているとき、ウシの群の中にミタン牛を見つけると、ブータン人の運転手は、わざわざ自動車を止めてミタン牛に見とれていることがあった。このような様子を見ていると、ハーンが、原牛は宗教的理由で家畜化されたものであって、経済的理由からではなかったとする主張もうなずくことができる [SIMOONS and SIMOONS 1968: 143]。

ブータンにおけるこのミタン牛飼育の最大の理由は、ミタン牛が林間放牧に耐えることにある。ブータンの森林地帯には、とくにモンスーン期には、おびただしい数の

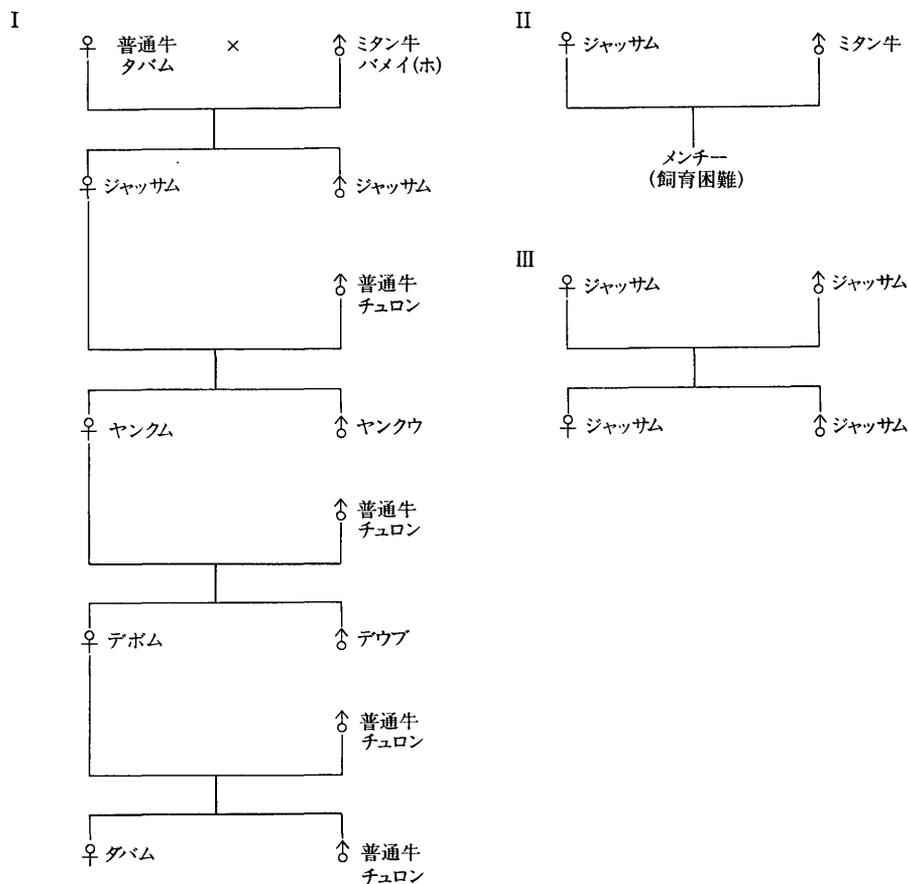
ダニやヒル（ペップ）がいる。このヒルは人間のみならず、家畜にもついて血を吸う。馬などは皮膚の軟らかい目の周りにヒルをつけて血を流している。当然足にもヒルが取りつき、道路には点々と血のしずくが落ちている。

その結果、ウシやウマを林間放牧すると、このヒルのために消耗し、思い通りに肥らないばかりか、鼻腔中にヒルが入った場合は、出血が原因で衰弱して死亡することもある。

それに対して、このミタン牛は、ヒルに血を吸われることも少なく、十分に林間放牧に耐えるのである<sup>4)</sup>。

この雄のミタン牛と雌のウシの交配により生まれるのが、ジャッサムとよばれる牛である。体型は普通の牛よりもやや大きく、角もやや大きい曲がってはいない。こ

表3 ミタン牛と普通牛の交配（[中尾 1971: 195] より）



4) 海外技術協力事業団専門家、西岡京治氏の話による。

のジャッサムは、大変よく乳を出すとのことである。ミタン牛と普通ウシとの交配による複雑な名称は中尾にくわしい[中尾 1971: 195]。表3にその名称をかかげた。

このミタン牛を手に入れるために、ブータンでは沈黙交易が行われていたという。それは、ブータンの国境の東側には、シャショ・バ、ダクバという人びとがいる。そして彼らがこのミタン牛を飼育しているのである。ブータン人がミタン牛を手に入れたくなったときには、合図の狼火を上げる。そして山の中のあらかじめ定められた地点に、これらの民族の好みそうなものを置いて帰る。やがて先方があらわれ、そこに置かれた品物が、ミタン牛一頭に見合うと彼らが考えたときには、そこに牛をつないでおき、品物を持ち返るのである<sup>5)</sup>。これは沈黙交易と呼ばれ、世界各地にこのような交易形態はあるといわれているが、栗本[栗本 1979: 105-106]も指摘しているように、これらの沈黙交易はいずれもが伝聞によるもので、それを実際に行ったという見聞による報告はない。ブータンにおけるミタン牛の交易も、そのような交易が行われていたという伝聞によるものである。

シモンズらは、ブータンにおけるミタン牛の交易について、次のように述べている[SIMOONS and SIMOONS 1968: 189]。

「もっとも距離の長くて興味ある交易は、J. P. マイルスがもっともよく記述しているが、NEFA [訳注、現在のアルナチャール・プラデシュ]とブータンとの間のミタン牛の交易である。一方の端には、ダフラ族がおり、かれらは肉として普通のウシを欲しがっており、ミタン牛が過剰である。もう一方の端には、普通のウシが過剰で、混血のために雄のミタン牛を欲しがっているブータン人がいる。(ミタン牛と普通のウシの混血は、純血の普通のウシよりも強いのだが、その混血種の雄は通常の不妊である[訳注、表3参照のこと]。それがために、純血のミタン牛の雄が必要となる。)ダフラ族は、西に隣接して住むラマイ(ミジ)族に、若い雄のミタン牛一頭につき、普通のウシ二頭から三頭と交換する。ラマイ族は、ミタン牛一頭につき、普通のウシ五頭から六頭とモンバ族との間で交換する。そしてモンバ族はブータン人と交易するのである。アカ族、シェルドックペン族、モンバ族、ブータン人の間には、ミタン牛をめぐる別の西方への交易がある。シェルドックペン族がアカ族から普通のウシと交換してうけ取ったミタン牛は、モンバ族やブータン人に大きな利益をもたらす。そしてブータン人は明らかにミタン牛をもっと西方にまで交易している。というのは、純血ないしは混血のミタン牛がダーズリンにおいても報告されているからである。」

今日のミタン牛の交易は、東ブータンの農民がトラックに乗ってサムドップションカールから国境を越え、アルナチャール・プラデシュのアカ族の部落を訪れ、現金で取り引きをするとのことである<sup>6)</sup>。

5) 皇太后付武官、リンジ少佐の話による。

6) 西岡京治氏の話による。

## 8. ウマの利用

今日ではブータンの主要幹線道路には、自動車を通じるようになり、運送に関しては、トラックや乗用車が用いられている。しかし、これらの自動車道はずれると、今日でも馬による運送が主力である。ブータンにおいては、今日もウマは貴重な運搬手段である。

ブータンの馬は大きくはないが、大変丈夫である。一人の馬子は通常5頭から6頭のウマを追っている。ウマは30キログラムの荷をおよそ二つ運搬する。そして、5頭から6頭のウマを追いたてる場合、先頭のウマには、頭の上に立派な飾りをつけ、ウマのひたいにあたる部分には鏡のついた飾りをつける。ウマの鞍は2～3枚の毛布を敷いた上に木製の鞍を置く。乗馬用の鞍も荷役用の鞍もそれほどの区別はない。ただ特徴的なのは、馬を制御するためのハミ(馬銜)がないことである。ウマの頭には手綱をとりつけるが、それを口にかませることはない。それゆえ、乗馬用の手綱もただウマの頭の方向を左右にできるだけ、ウマをハミによってコントロールすることにはならない。

ブータンにおける伝統的な運送の方法を、プナカとラヤ村の間で見ることにする。プナカとラヤ間は、160キロメートルの距離がある。もしプナカを出発点として、ラヤに旅行および荷物の運送を行うとすると、もしそれが、個人の荷物であるならば、それは個人のついでで荷物を運んでくれる人を見つけ出し、その人に依頼するしか方法はない。しかし、ブータンには運送を専門にしている人は居ないので、結局はついでをたどって、荷物をはこんでくれる農民を探し出すことになる。

しかしもしこれが、政府の荷物ないしは政府の客である場合には、地方行政府の長であるゾンダが、村長であるガップに命令を出す。この場合、この命令は半ば強制的である。ゾンダからの命令を受けたガップは、荷物に見合った馬と人夫を村にわりあてる。そして村人がその運送にあたる訳である。この場合、その任にあたることは半ば強制されてはいるが、賃金が支払われる。

しかし、人夫および馬は、厳密に受けもち範囲が定まっている。たとえば、プナカの馬と人夫は、ガサ・ゾンまでの3日しか運送に従事しない。それを越えては、プナカの村人は絶対に物を運ばないのである。つぎのガサ・ゾンからタクチマカンまでは、ガサの人びとの受けもち範囲である。そしてタクチマカンを越えた高所は、ラヤの人びとが、馬、ヤクおよび人力で運ぶ。

このような運送において、ネパールのようにナイケとよばれる差配が人びとを指揮

することはない。村長が出てきて、荷物の量に見合う人数があつまっているかどうかを確認するが、金銭的に介在して口銭をとるような行為はない。

このように、運送に関して、伝統的に村の受けもち範囲が定まっている所は、大変その点スムーズな運送が出来る。プナカとラヤの間は荷物の運送量も多く、このようなシステムがよく整備されている地域である。このプナカとガサの間には、ガサ・ゾンが所有する公用の馬もいる。

その他の動物利用としてヒツジをあげることができる。ヒツジは、羊毛をつむぐために大変重要なものであるが、ヒツジを重点的に飼育しているのは、ペレ・ラを東に越えたルクジー村とツェンデプジー村である。このあたり一帯では、おびたしい数のヒツジを飼育しているが、これ以外の場所では、それほどヒツジを飼育している場所はない。ルクジー村とツェンデプシー村ではともに毛織物がさかんである。

## 9. トランスヒューマンズ

ブータンの牧畜においても、標高差を利用したトランスヒューマンズが行われている。たとえば、ヤク飼育を行っているラヤ村の場合、夏には5,000メートルほどを上限として、タクチマカン、ジョンプーナのあたりでヤクの遊牧を行う。この場合牧畜民は、ノーチムかまたはテント生活をすることになる。リュリタンのノーチムのまわりには、ヤクが入り込まないように石で囲った100平方メートルほどの野菜畑もあった。ここで植えられていた野菜はカブの類であった。このマサ・コンの谷筋も10月中旬には、5,000メートル前後にまで雪が降る。それにつれて牧畜民は、ヤクの遊牧地を下げしていく。そして2月から3月にかけては、ヤクの一部を連れてプナカ(標高1,300メートル)のあたりまで下りてくる。そしてプナカでヤクの一部を売り払い、必要なコメやムギを買ってまたラヤの村に帰って行く。

ヤク一頭の値段は、前に述べたように、モミ300キログラムに相当する。

ヤクは通常3,000メートル以下では病気となり飼育できないといわれているが、このような冬季には、プナカにまでつれてこられるし、京都大学の報告書には、冬季ブムタンの近く2,400メートル地点で、ヤクの群れを見たという報告がある [桑原(編)1978: 172]。

このような、トランスヒューマンズは、ヤクを飼育する牧畜民だけに限ったものではない。ウシを飼育する農民もまた、ウシを連れてトランスヒューマンズを行っている。農民のトランスヒューマンズは、10月中旬、イネの収穫が終わったころ、人びと

は、いろいろな家財をかついで、南の温暖の地に向けて出発する。このときテントはいうにおよばず、ウマやウシの背には冬の間の生活必需品一式をかつがせている。そして彼らブータン人の生活にとって欠くことのできない、バター茶をつくる道具を背負っている姿は印象的である。また老人はウマの背に乗せてつれていく。犬までもくさりにつなぎ連れて行く。冬営地に向かう群れは、20頭から多い場合には50頭のウシの群れを追いつながら、南へと下っていく。

このようなトランスヒューマンスで興味あるのは、ペレラの南に位置する標高2,900メートルのカンティゲンバである。このカンティゲンバは、ペレラから南にのびるブラック・マウンテンの北端に位置する村であり、その村の僧院はカンティゲンバ風の建物として、ブータン内では瀟洒な建物の代名詞である。

このカンティゲンバがトランスヒューマンスにおいて興味があるのは、冬にはヤクを追った遊牧民がこのカンティゲンバを冬営地とするのに対して、カンティゲンバで夏を越した農民は、ウシをつれて、もっと南のシェムガン方面に下って行くことである。その意味ではカンティゲンバはヤクを飼う遊牧民と牛を飼う農民の接点であり、その二つの生業形態を異にする人びとが、たくみに季節による棲み分けをしている地点ということができるだろう。

## 10. ソバ作り

「ブータンには九つの穀物が育つ」とはよくブータンで聞かされることわざである。その九つの穀物とは、西岡氏によれば、ソバ、ダッタンソバ、大豆、米、小麦、大麦、シコクビエ、アマランサス<sup>7)</sup>、アワである[西岡・西岡 1978: 66]。

ここでは、これらの穀物のうちでブータン人の生業に大きくかかわる、ソバ、ダッタンソバ、コメについて見てみたいと思う。

コメの栽培限界である2,700メートルを越えた高所では、おのずから低温となり、コメ以外の作物が栽培されることになる。その代表的なものが、ソバである。

ブータンにおいては、ソバは2種あり、その内の本種は、通常のソバである。これは日本のソバと何らかわるところがない。

つぎには、ダッタンソバといわれる品種がある。ダッタンソバは、ネパールからシキム、ブータン一帯で栽培されているもので、耐寒性が高い。その特徴は味である。ダッタンソバは、その異称がニガソバといわれるように、その味はかなりはにかい。

7) ヒユ属、*Amaranthus*、の植物の総称。ヒモゲイトウなど深紅色の花で、不凋花、常花として観賞用に栽培されている。食用としての実態は、カユ酒にしたり火で炒ってはじいたものを食べる。

ここでは区別のために、本種のソバをアマソバとよび、ダツタンソバと区別することにする。

ブータンでは、アマソバとダツタンソバは混播されて栽培されている。そしてブータンの農民の話では、アマソバも連作をつづけると、ニガソバに変わると信じているようである。しかし日本で調べたかぎり、アマソバとニガソバは植物学的には交配することはないという。それよりも、ニガソバののが味は皮の部分であり、連作をつづけると、皮の部分が肥厚し、よりにが味を増すことはあるとのことであった<sup>8)</sup>。

それとともに、もうひとつ考えられる理由は、アマソバとダツタンソバを混栽すると、耐寒性の強いダツタンソバが優勢となり、アマソバを駆逐し、結果として、ダツタンソバが優勢になると考えられる。日本の稲作においてもヒエとコメを混栽するとヒエが優勢となり、結果として「コメがヒエに化けた」といわれる現象に通じるものであろう<sup>9)</sup>。ソバの栽培に関しては、季節的にはかなり自由度が高いようである。ブータンを旅行していると、季節にかかわらずいたる所で、ピンク色のソバの花を見かけるので、地域差があるにせよ、かなり自由な時期にソバの種まきが行われているようである。栽培に関しては、特記するべきものはない。トンサの東ゲツター（標高2,900メートル）で見たソバの栽培はつぎのようなものであった。牛2頭で引かせた犁でたがやした畑にソバを播種し、60～70日後に刈り取る。

ソバの脱穀は向い合った二人のうち一人が、フォーク状の木でソバの枝を空中にほうり上げ、一方がそれをたたきおとして脱穀する。この実を乾燥させて貯蔵する。脱穀されたソバの茎は、燃料として用いられるのは日本と同じである。

乾燥されたソバの実の段階で、アマソバとニガソバは区別できる。まるみをおびた実がアマソバで、ニガソバは角ばった実である。しかしブータン人は、この二つを選別することもなく、タンルップというザルの中に石臼を置きそれで粉にする。

ソバを食するときは、ソバ粉を大きな器にいれ、徐々に水を加えて練る。この時には、小麦粉のようなつなぎを加えることはない。この練り上がったソバをプタとよばれる器具（図5）に入れ、そしてこの柄の部分に腰をかけて、ソバを下の方から押し出す。押し出されたソバは、すぐにお湯の中に入れてかるくゆがく。お湯の中で浮き上がった程度で、水の中に入れ、ぬめりを取る。このようにして、練り上げたソバ粉をすべて、麺にしてゆで上げる。

つづいて、このゆでたソバの上に、アサツキを散らし、トウガラシをふって、熱し

8) ダツタンソバののが味に関しては、信州大学、氏原暉夫氏より、ご教示をうけた。

9) この考え方は、国立民族学博物館、小山修三氏より、ご教示をうけた。

たマスタード・オイルと脱脂乳をその上にかけて食する。この料理もプタとよばれている。味にはにが味がある。

この他にも、練ったソバを手の平の上で器状にし、バターとトウガラシを加え、それをなじませながら食べる、ソバガキ風の食物がある。

彼らは夕食として、このソバを手のヒラの上に乗るほど小さな木製の器に3杯から4杯食べるだけである。

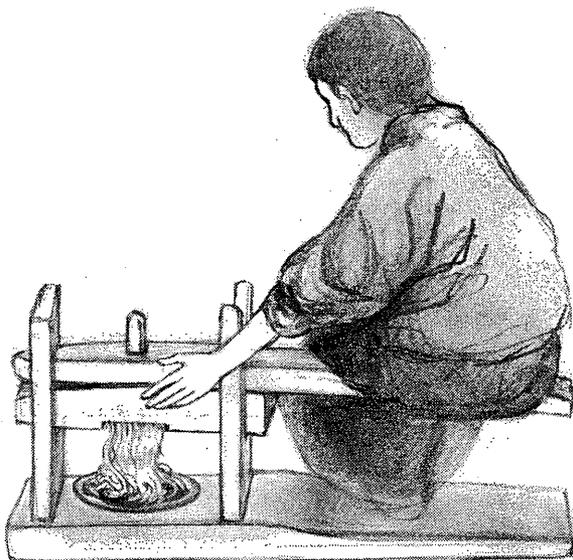


イラスト 安芸早穂子

図5 ソバづくりに用いられるプタ

## 11. 稲 作

ブータンにおける代表的作物は、コメである。稲作は、標高200メートル程度の南山麓一帯からはじまる。この稲作は南山麓一帯で行われている。ブータンにおける稲作について述べる時、まず指摘しなければならないことは、稲作が2,700メートルの標高で行われていることである。パロの近郊に、デュゲゾンという城塞の廃墟があり、その上流一帯で稲作が行われているが、多分これは、世界で一番標高の高い稲作であろう。

ブータンでの稲作の栽培品種は、アカゴメである。アカゴメは、ジャポニカ種に属するコメで、明治時代以前は日本にも多く見られたという。しかし今日ではすっかり駆逐され、種子島の茎永の宝満神社や対馬の豆酸の多久頭魂神社の神田など全国数カ所で、細々と栽培されているだけである [佐々木 1982: 114]。ブータンの稲の品種に関しては、1969年の京都大学山岳部の報告にくわしい [桑原(編) 1978: 189]。それによると、彼らは、プナカ近辺で「ボドリカップ」(白米)、「シャゼマム」(赤米)、モンガルとリンメタンの間のクル・ザンパ(500メートル)では「バーラ」という陸稲、またサリンでは「カムレ」とよばれるコメを収集している。

稲作の技術に関して述べると、田おこしには犁が用いられる。これには、ウシ二頭をニャシン (*nya shing* 標本番号 HO115698) とよばれるくびきでつなぎ、カミ (*kha me* 標本番号 HO115699) というスキでスキおこしをする。スキにはこのほかに、シェオ (*shay wo* 標本番号 HO115700) やツェチュン (*tshe chung* 標本番号 HO115701) とよばれる、水平ならしのスキも用いられる。一方春のはじめにモミをまき、ナワシロをつくる。そしてそれが成長した頃に田植を行う。

1913年、トンサを訪れたホワイトは、田植の儀礼について、次のような記述を残している [WHITE 1914: 419]。

「ある日の早朝、鐘の音がなつて田を祝福する春の儀礼が始まることを告げていた。ドンヤー (Donyer) に導かれて、絵のように美しい男女の行列が山腹をめぐるきて前日までに水が引かれていた田に到着した。下の方の田はまだ水がなく乾燥していたが、人々はそのに座りこんで、軽い食事をはじめた。突然、男たちが着物をぬぎすて、とび上がった。これを合図に女性たちは、水びたしの田に入り、土くれや泥水を、下の田から上の田に上がろうとする男たちにかけて。そして、男たちは水田に入ろうとし、女たちはそうはさせまいとする他愛のない争いがつづいた。男たちのリーダーであるドンヤーは、戦いの礼儀が厳格に守られてはいるものの、こっぴどくやられた。しかし、もしひとりの攻撃者が倒れたら、敵の女たちが助け起こし、次の攻撃が来る前にしばし息をつく暇を与えてやった。しかし、しだいに女たちはゆっくりと男たちを水田の隅に押しやり、ついに屈強な役人が最後の抵抗を示した。彼は敵に背中を向けて上につき出た岩にしがみつき、足で大量の泥と水をはねとばし、誰も近づけないようにした。しかし、他の男たちは追いはらわれたままで、その男とドンヤーのふたりだけがあぜ道をはい上がってくるのを許され、その年の戦いは終わった。これは非常に幸先の良い終結と見なされ、女たちの勝利は夏の間の肥沃な土壌と家畜の増加を予言していると思われた。このようにして人々はそれぞれの家に喜びをもたらしたのであった。」

この農耕儀礼では、多くの民族で見られるように女性が勝つことによって、その生産力の強さが象徴されているということができよう。

田植前のスキ起こしは3回でウシによるスキを用いている。中尾の観察では、これらのスキ起こしでは、天地返しがないと記述している [中尾 1971: 215]。もっとも中尾が見たのは、中央ブータンのブムタン地方のソバづくりの地帯である。

1981年、農業副大臣のペマ・ウォンチュク氏から稲作についての聞き取り調査を行った。

それによると、苗代 (ツァーム) は陸苗代で、3月にスキ起こしをせず、直接モミをまく。そしてパロにおいては6月中旬に田植をするという。この間の期間があまりにも長いことを、佐々木も驚くべきことと記述している [佐々木 1982: 113]。

田植においては、正条植えは行われぬ。すなわち、田植をする人が、手をのばして植えられる範囲に扇形にイネを植えつける。これは田車で草とりという技術がな

かったために、このような正条植えが行われなかったという。アカゴメを植えた田と、普通米を植えた田は、稲の生育に従って明らかとなる。それは、アカゴメの田の方が、イネの色が濃いからである。ティンプー近くの田でこの色による判別法をもちいると、アカゴメ 4 に対して、普通米は 6 の割合で栽培されているようである。

収穫は、パロの場合10月のはじめごろからはじまる。アカゴメの収量は、パロにおいては、10アールあたりモミで300キログラム前後であるが、アカゴメは脱粒性が高く、タテきねをつかってモミスリを行うのでロスが多く、結果としては、10アールあたり180~240キログラム程度である。イネ刈りには、ソラ (*sora(h)* 標本番号 HO 115705) とよばれる鎌を用いて根刈りを行う。日本と異なるのは、刈りとったイネはそのまま地面に置く。もうこの頃には、めったに雨が降らないので、このような方法で乾燥させる。乾燥した頃に取り入れを行うが、この場合イネの穂を内側に向け、円形にして田の上に積み上げる。イネの穂を内側に向けるのは、ネズミの食害を防ぐためである。

その後、徐々に脱穀を行う。ブータンにおける伝統的な脱穀の方法は、イネをツェンタ (*tshan ta* 標本番号 HO115711) やレディ (*redhi* 標本番号 HO115710) というマットの上にひろげ、胸の高さほどの所に横木を一本渡し、それにつかまりながら、足でイネの穂をこすり取るようにして脱穀する方法である。そしてこのようにして脱穀されたモミを、羊毛またはヤクの毛で編んだ袋に詰め、コンバ (*khom ba* 標本番号 HO115708) やルパ (*lupa* 標本番号 HO115709) とよばれるカゴに入れて農家の屋根裏の風通しの良いところに保存する。

イネ刈りが行われる時には、初穂で飾りものをこしらえ、これを自家の仏間に供えるという儀礼が行われる。しかし、イネワラの利用という点に関しては、ほとんど見るべきものはない。たいがいの場合、牛の飼料として利用される程度である。

モミスリには、ツォム・ダン・リュウ (*tshom dang leo* 標本番号 HO115730, HO 115731) とよばれるタテギヌとウスを用いる。この際に、多量の破米が生じる。

また新米をこぞって食するという習慣もない。イネを円形につみ上げて放置するのも、わが家はすぐに新米を食べなくとも、十分に食料の貯蔵があることを誇示するためであるという。

コメの炊き方は、湯たて法である。すなわちナベに十分の湯を沸し、それにアカゴメを入れる。この場合とくにコメを洗うということはない。適当な時間コメを煮て、やわらかくなった頃、余分の湯を捨てる。そして残ったコメを火のそばに置いてむらす。できあがったご飯は、日本の赤飯と同じ色をしたものである。ブータン人は、こ

のアカゴメを一日に約1キログラムほどたべる。

このコメは、このようなご飯として食べるほかに、炒ってから、白でつき、押し米をつくる。これは、ザウ(炒り米)、シップ(ひしゃび米)とよばれお茶の際にバター茶の中に入れて食される。

このように発達した稲作耕作が行われている地帯があるのに対して、ブータンの東方のタシガン周辺、中南部地域のシェムガンにおいては、今日でも焼畑農耕が行われている地帯があることを観察した。

## 12. む す び

いままで見てきたように、ブータンの生業形態は、ヒマラヤの高度に従って、種々の様相を示している。ブータンはその高度に従って三つの地域に分けることができるだろう。

ブータンでは、およそ4,100メートルの高度から人の定住がはじまる。しかし、このような北部の高山地帯では、年間降雨量は400ミリメートル程度であり、その雨量の60～90パーセントは、モンスーン期間中に降る。この地域においても、オオムギの粉やコメを主食としているが、そのほかにも多くの量の乳製品を摂取している。この場合のオオムギやコメは低地との交易によってもたらされたものである。この地方におけるおもな生業形態は、ヤクの飼育である。

中部のインナー・ヒマラヤ地域では、雨量は1,000ミリメートルほどであり、西部地域ではそれ以上の降雨がある。すでに述べたように、3,000メートルから2,400メートルまでの地帯では、ソバ作りが中心となり、ウシ利用がはじまる。

南部のヒマラヤの裾野のベルト状地域は、熱くて湿気が多く、気温は15度から30度の間で、ある地域では2,500ミリメートルから5,000ミリメートルの降雨がある。いうまでもなく、この高度においては、稲作がその中心的な生業形態である。それと同時に、このような地域に発達した照葉樹林の中には、広くブータンからインド・アルナチャール、ビルマ北部、雲南省にひろがる照葉樹林文化としての共通性を認めることができるのである。

中尾らは、ブータンに対する文化的影響について、次のように指摘している[中尾・西岡 1984: 110]。それによると、ブータンの文化に対するチベット文化からの影響としては、男性の服装ゴ、ヤク飼育と乳製品加工、言語、特殊なオオムギ品種群(三叉芒)、コムギなどを数えあげている。それに加えるとするならば、男性がゴの懐に

入れているナイフや小さな食器も、遊牧生活からもたらされたものとして指摘することができるだろう。

つぎに、ブータンの文化に対する照葉樹林文化からの影響としては、つぎのような項目を指摘している。それは、女性の一枚布の服装キラ、歌垣や婿入り婚、水田耕作、稲作、焼畑農業、タロイモ（サトイモ）、ヤムイモ（ヤマノイモ）、麴使用の酒、野生根茎の水晒し食用化、ヤドリギの茶、ソバ、納豆、ナッツ・オイル、リュキュウアオイの利用、紙作り、竹製品、野生カイコの類の利用など無数にあると述べている。これに加えるならば、ミタン牛の飼育を加えることができるだろう。

それに対して、ブータンに対するインド文化からの影響は、ラックの利用、すなわちカイガラムシを利用した染色にしか見られないと述べている。

中尾らのこれらの指摘は、民族植物学の立場にもとづく、綿密な資料によるものである。しかし、これらの指摘の中で、照葉樹林文化からの影響と指摘したものの項目数が多いゆえに、ブータン文化のほとんどすべてが照葉樹林文化の中で形成されたものと考えられることには問題があるだろう。

私自身、ブータン文化の祖型はチベットにあり、ブータン文化は、照葉樹林帯に入り込んだチベット文化と把握した方が適切ではないかと考えている。すなわち、遊牧を基本とするチベットの文化が、緑したたるヒマラヤの南山麓に下って来たとき、どのような変化を受けたのであろうかという点が、私がブータン文化を考える上での大いに興味ある点である。

それとともに、ブータンの文化をより詳細にみると、北部地帯では、チベット文化が色濃く残っているのに対して、高度を下げるに従って照葉樹林文化の影響が濃厚になってきている。このことに関しては、本文の中ですでに述べた。私は、ブータンの文化をひと言で述べるならば、それは「木に出会ったチベット人」と表現したいと考えている。チベット高原とりわけチベット高原中央部のチベット人の暮しは、石と皮の文化である。かつてチベット人の生活を観察したとき、移動するチベット人が、遊牧用のテントの長い支柱をヤクで運んでいるのを見た。チベットにおいては、テントの支柱となるべき木がいかに得がたく大切なものであるかを目の当たりにした思いがした。チベットでは木切れの棒までが貴重である。当然住居は、石と泥でつくられている。

それに対して、ブータンは緑豊かな自然である。谷筋には4,000メートル前後まで樹木が生い茂っている。ブータン人の住居は、木材をふんだんに使った家である。たしかに牧畜の夏営地などでは、ヤクの糞を燃料にすることもあるが、それはあくまで

補助的なものであり、ブータン人は薪木を燃料としている。

それとともにブータン人が用いる日常生活用具の多くが、いかにたくみに木や竹を利用してしているかは、すでに述べた通りである。

一方ブータンの南に存在する巨大なヒンズー文明が、ヒマラヤをはい上ってブータンに影響をもたらしていないことは、大変興味深いことである。この点に関して栗田は、それはそれぞれの文明の特異性にもとづくものであろうと論じた [栗田 1984: 22-35]。ブータンの文化を考える上で、ヒンズー教に代表されるインドからの影響は考慮する必要はない。

いまひとつここで問題にしなければならないことは、稲作がどこからもたらされたかということである。稲作の起源に関しては、ベンガル地方のウキイネとする説やもっと東の中国雲南と考える説がある。しかし、いずれにしても、これらの稲作の起源地が、ブータンより見て、南または東に位置することである。

稲作という点に関して見るならば、ブータンに稲作がどのようなルートをたどってもたらされたかが問題となる。すなわち、イネの起源地と思われるベンガルか雲南から、どのようなルートをたどって、ブータンにイネがもたらされたのであろうか。

この点を明らかにするためには、われわれにとって、インドの東北部の調査が不可欠である。しかしこのアッサム、アルナチャールの学術調査が十分に行われていない現在、イネの伝播ルートについて軽々しく論じることはできないであろう。ただ稲作の発祥地をブータンと仮定しない限り、稲作はブータンの南ないしは東の低地からもたらされたことは事実であろう。

チベット文化はブータンにおいて木と出会った。それとともに、イネとも出会ったことは重要なことである。それがために、チベット文化がブータン文化へと変容し得たのであろう。

本稿においては、ブータンの生業形態をその高度差において見ることを目的とした。そしてそのことは、おのずからブータンの文化を南北の軸にそって見ることになったのである。しかし最後に、ブータン文化の東西の差異について、ふれておく必要があるだろう。西ブータンと東ブータンにおいては、そこにおける人びとの出自の意識に大きな違いのあることはすでに述べた。すなわち、西ブータンの人びとは、自らの出自をチベットであると認識しているのに対して、東ブータンの人びとは、自らの出自をアッサムであると認識していることである。そしてまた、図3において見たように言語もブータン各地において大いに異なっており、共通語の普及も十分には浸透していないのが現状である。

しかし、このようにひとつひとつの要素を取りあげて見ると、ブータンの東西において異なっている部分もあるが、このような部分的な相違を越えて、ブータンの文化には、むしろ強い共通性が存在しているのである。本稿においては、取り上げはしなかったが、ブータン人の精神世界を律するチベット仏教の存在、ブータンの西から東にまで共通な男女の服装、コメや乳製品に対する強い嗜好性といった側面は、国の東西にわたって共通の文化的基盤として共有されていることを示しているのである。

そしてこのことが、まぎれもなくブータンがその文化の祖型をチベットにもちなながら、チベット世界とまた違ったひとつの外皮をもった独自の文化圏を形づくっていることを意味しているのである。

たしかにブータンの文化は、その基盤はチベット文化からの影響が大である。ブータンの文化を語るときに、このチベット文化からの影響を抜きにして語ることは、大へん不都合なことと云わなければならない。

しかし、ブータンの文化を、ただチベット文化のひとつの亜流とすることでは、これもまたあやまったことなのである。ブータンには、照葉樹林文化に共通に見られる文化要素が歴然と存在している。

この二の文化の系の織りなす座標の上にブータンの文化を位置づけるとき、ブータンの文化に対する正しい位置づけをすることができるであろう。

## 文 献

- アイザック, E.  
1985 『栽培植物と家畜の起源』山本正三, 田林 明, 桜井明久共訳, 大明堂。
- 藤井理行  
1977 「氷河」川喜田二郎編『ヒマラヤ』朝日新聞社, pp. 136-144。
- KARAN, P. P.  
1967 *Bhutan: A Physical and Cultural Geography*. University of Kentucky Press.
- 栗本慎一郎  
1979 『経済人類学』東洋経済新報社。
- 栗田 靖之  
1984 「イネとヤクとラマ僧——ブータン文化のタテ糸——」『季刊民族学』30: 22-35。
- 桑原武夫 (編)  
1978 『ブータン横断紀行』講談社。
- 中尾佐助  
1971 『秘境ブータン』(現代教養文庫:727) 社会思想社。
- 中尾佐助・西岡京治  
1984 『ブータンの花』朝日新聞社。
- NEGI, G. S.  
1983 *Forestry Development in Bhutan: Report on remote sensing land use and vegetation mapping*. Rome: United Nations Development Program Food and Agriculture Organization of United Nations.

NHK 取材班

1983 『遙かなるブータン』日本放送出版協会。

西岡京治・西岡里子

1978 『神秘の王国』学習研究社。

*Royal Government of Bhutan*

n. d. *Royal Government of Bhutan: Fifth Plan 1981-1987 Main Document*. Planning Commission.

佐々木高明

1982 「ブータン紀行——照葉樹林文化のふるさとで見たこと、聞いたこと——」『季刊民族学』20: 108-122。

SIMOONS, F. J. and E. S. SIMOONS

1968 *A Ceremonial Ox of India: The Mitha in Nature, Culture, and History*. University of Wisconsin Press.

ストゥリドンク, G. V.・F. P. イマエタ・今枝由郎

1985 『ブータン——東ヒマラヤの王国——』講談社。

WHITE, J. C.

1914 *Castles in the Air: Experiences and Journeys in Unknown Bhutan*. *The National Geographic Magazine* 25 (4).

安成哲三・藤井理行

1973 『ヒマラヤの気候と氷河——大気圏と雪氷圏の相互作用——』東京堂出版。